

中学校総合学習におけるESDの視点からの提案型地域づくりの構想

—エコシティ奈良；公共交通を軸とした世界遺産都市の町づくりの提案に取り組んで—

竹村景生

(附属中学校)

谷口義昭

(附属中学校校長・奈良教育大学木材加工研究室)

池島徳大

(奈良教育大学大学院教育学研究科専門職学位課程)

八尋薫子・今辻美恵子・佐古田康一

(附属中学校)

The concept for the proposed type community improvement from the viewpoint of ESD in junior high school integrated study
—Eco-city Nara; tackle the proposal of the town planning of the world heritage city centering on public traffic—

中学校総合学習におけるESDの視点からの提案型地域づくりの構想

－エコシティ奈良；公共交通を軸とした世界遺産都市の町づくりの提案に取り組んで－

竹村景生

(附属中学校)

谷口義昭

(附属中学校校長・奈良教育大学木材加工研究室)

池島徳大

(奈良教育大学大学院教育学研究科専門職学位課程)

八尋薫子・今辻美恵子・佐古田康一

(附属中学校)

The concept for the proposed type community improvement from the viewpoint of ESD in junior high school integrated study
－Eco-city Nara; tackle the proposal of the town planning of the world heritage city centering on public traffic－

Kageki TAKEMURA

(Junior High school attached to Nara University of Education)

Yoshiaki TANIGUTI

(Wood Working Laboratory, Development of Technological Education, Nara University of Education)

Tokuhiro IKEJIMA

(Center for Educational and Development, Nara University of Education)

Shigeko Yahiro・MIeko Imatuji・Kouiti Sakota

(Junior High school attached to Nara University of Education)

要旨：「奈良エコプロジェクト」は2年前（2009年度）に本校第3学年「卒業研究」で行った「佐保川プロジェクト」に引き続き、中学生が出来るESDの立場に立った地域デザインを構想するプロジェクトの第2弾である。卒業研究は基本的に個人で行うものであるが、このプロジェクトはフラグシップで行われている。今回の「奈良エコプロジェクト」は、世界遺産都市奈良の景観に配慮した公共交通を考えるということで、「社会的共通資本の学びとしてのESD」を意識した取り組みである。また卒業研究の取り組みを、人間を豊かに成長させる学習システムとして、生徒・教師・専門家が相互自立的なパートナーシップを構築しながら世界・他者・自己の意味を絶えず生成していける学び合いと捉え、「物語共同体」に位置づけていく。

キーワード：ESD、持続可能な開発 Sustainable development、社会的共通資本 Social Overhead Capital、世界遺産 World heritage、L R T、公共交通Public traffic、物語共同体 Narrative community

1. はじめに

2002年度から始まった奈良教育大学附属中学校の卒業研究は、今年（2011年度）で10年目を迎える。私たちは義務教育を終える生徒たちが、9年間の学びの意味を見失うことなく、その学びの成果を自らが実践し（「問い」を）生きていく、まさに社会性をもった「学びのリアリティー」を獲得していくために、さらには

「かたち」として表現していく主体として変容していくために、「生徒たちの将来に実践的な力となる学力形成とは何だろうか」と問い続けてきた。そこに卒業研究を位置づけ、附属中学3年間の教科学習や「総合的な学習の時間」の総まとめとして企画し、取り組んできたのである¹⁾。

卒業研究のねらいは、以下の通りである。

・学問の世界の深さと広がりにつれ、自分の進路を

考える契機とする。

- ・一人ひとりの学習者が自分の問いを持ち、その問いを追究することを通して、自己と向き合い、自己を見つめ直す。
- ・卒業研究をまとめ発表することを通して、情報活用能力や人とのコミュニケーション能力、表現力を高めることは、豊かな人間形成の学力として教科学習を強化・補完する。
- ・ESDの理念が、自身の研究課題とどこでつながり、むすばれ、実現されていくのかにも言及する。

本稿では、従来より大切にしてきた卒業研究のねらいである上記3点を踏まえた上で、4点目のESDの実現のために中学生たちはこの奈良（ここでは世界遺産を含む奈良市旧市街地周辺に限定する）から、どのような持続可能な町づくりのデザインが構想できるのかを、特に自分たちの通学とも関わりを持つ公共交通に焦点を当てて取り組みを行った経過とその成果を報告する。それとともに、総合的な学習の時間におけるESDの視点からの提案型地域づくりの構想の教育的意味を「物語共同体」(庄井2002)に位置づけていく。

2. 卒業研究が育む学力

生徒たちが興味を持って探求する課題は総合的であったり、きわめて狭い範囲に限定された内容であったりするが、卒業研究というパッケージでくれる学力は多様である。ここでは特に次の4つの学力を取り上げておきたい²⁾。

- ① 課題発見力 ② 発想力・企画力・構想力
- ③ 情報活用能力 ④ 発表・表現力

①について、Nさんは次のように感想を述べていたことが注目される³⁾。「この春から『卒業論文』を作成して、テーマに沿って長い文章を書くことは簡単なことじゃないと思った。私の論文は、はじめと全然テーマが違ってしまった。だけど、逆に、今書き終えた方が自分が調べたかったことだと思った。論文を書いてみて、自分は何がしたいかとか、何が言いたいかなど、自分の意志を表すことは大切だと思った。卒業論文発表会でみんなの論文を聞くと、みんな自分のしたかったことや言いたいことがはっきりしていた。私は、もっとああすればよかったとか、こんな風に調べればよかったかと思いながら聞いていた。」(現在は「卒業研究」「卒業研究レポート」と呼んでいるが、当初は「卒業論文」と呼んでいた。ここでは当時の表記のまま。以下生徒の文章では当時の呼称「卒業論文」「論文」で表記する。)

授業では求答型の「問い」が中心となり、心理的には「この問題を解かねばならない」と生徒たちは学習場面で迫られているように思える。しかし、その積み上げられたスキルの経験が必ずしも自分の「課題発

見」や「問い」という形で、意欲的に高められるとは限らない。このNさんの感想は、私たちが現在取り組む「卒業研究レポート」づくりの「子どもの真の課題となっているかどうか、真の課題にしてやる配慮が十分であったかどうか」(松原p.42)という試金石でもある。しかし、松原がいう「これが彼らの課題となるには、それがいままで彼らによって皮相的にとらえられていたことを自覚させて、この中にまだまだ知るべき何かがあると気づかせることである。「面白そうだ」という自覚とは、このことを指す。」(松原・p.43)ためには、課題意識の自覚の段階が必要となる。ここで、課題意識に導くとは、すなわち「考える」面白さに出会うことであり、「考え続ける」価値を体験することである。そして、その「考え」が社会的有用性を持ち得ることを実感できる場面を、私たちが彼らに提供できるかである。

次に②の「構想力」についてふれておきたい。これは、卒業研究の取り組みの中で、私たちが一番大切にしてきたところである。ここで紹介する、Aさんの感想は、この「構想力とは何か?」という問いに答えてくれている。

「3年生になり、この3年間のまとめとして卒業論文に取り組んだ。私は、これまでに図書館に行くことはあったけれど、閉館ぎりぎりまで残ることはなかった。でも、卒業論文を書くためにそんな日が多くなった。夏休みに読んだ本の数は30冊。こんなにたくさん本を読んだことはなかったから、自分にとってのもすごく新鮮で、本を読んでいる時間もとても楽しかった。本は私にいろんなものを与えてくれ、ときには、私の持っていた考えを否定するようなものもあった。大学の先生からもお話を聞くことができ、とても参考になったのでうれしかった。私の論文を学年のみんなに聞いてもらえる機会があったのも、本当にうれしかった。」と、様々な「対話」を経て、「問い」は「考え」となり、Aさんのかけがえのない「個人的経験」に結晶化され、自覚されていく。「私の論文はまだ未熟で、参考になるものを手あたりしだいに探し、自分なりにつめこんだだけのものかもしれないが、自分のやりたい研究ができたことがすごくうれしい。また、機会があるなら、この研究を先へ進めてみたい。卒論を通して、やっと「自分の進路を考える」意味が分かった。」というAさんは、さらに自分の進路、人間の幸せについて考えを深め、構想していくのである。

「私はこの論文に取り組むまでは、将来医学の方面に進みたいなあと思っていました。普通に高校に進み、医科大学に進学し、どこかの病院に勤められればいいぐらいにしか考えていませんでした。しかし、今は、ゲノム解読などの生命科学の方面に進んで研究してみるのもおもしろそうだなあと思っています。・・・何が人間にとって幸せなのか。それはこれ

からのゲノムの研究で人間とは何か明らかにできると分かることでしょうか。私個人的には、次のように思います。『人間の幸せとは生物と共存し、限りある自分の時間を一生懸命くいのないよう生きぬくこと。』しかし、人間が本当の答えを見つけたとき、人間はどうなっているのでしょうか。・・・この論文で考えさせられたこと。それは生とは何か、死とは何か、そして人間の本当の幸せは何か。今まで身近な人の死を悲しみ、恐れてきた私。しかし、それは人間が自ら選んだ道であり、この地球上に生まれてきたものの宿命です。今回の論文で生と死について改めて考え、私のものの見方が変わりました。・・・」

Aさんが人間のいのちが必要とする医療とは何か？医療は人の健康や幸せとどの様に関わり合っていくのかと、「社会的共通資本」としての医療に出会い⁴⁾、生と死を見つめ、問いを対話的に深めていくことによって、学びが根源的ないのちにつながるという体験を経て、社会的な自己のあり方（自己実現）の構想力に目覚めたと言えないだろうか。そこに、Aさんの自らの主体変容の姿をみる思いがする。

ところで、本校のESD実践が始まって6年目を迎えた2011年3月に東日本大震災が起り、3.11の衝撃は私たちの生き方や社会のあり方に対して根源的な反省を迫る機会を与えることになった。それは云うまでもなく、ESDが子どもたちに示すべき方向性を改めて明らかにしたといえる。また、学ぶ側の子どもたちにもたらされた衝撃は大きく、この災害を内発的に乗り越えていくという希望を自身の中に発見する機会となった。

本校では1987年に生徒会で提案されて以来、毎年取り組まれている「平和の集い」（2011年のテーマは「震災から学ぶ」である。）がある。この平和の集いでは、なかまの震災ボランティア体験の報告の後、ASPネットにつながる気仙沼市教育委員会の及川幸彦氏の講演があり、最後に気仙沼の3.11のESD的な乗り越えの指針が示された。それは、持続可能な地域づくりを目指して、①災害時の危機対処能力を高める、②「海と生きる」～自然と共生した暮らし～、③地域の豊かな食材を生かした街づくり、④地域の伝統・文化の再生・復興、⑤世界との絆を結ぶ国際教育、⑥国や地域を越えた「学びの交流・共有」、⑦地域の未来をデザインする力、という内容であった。

これらの7項目は私たちがESDの実践として取り組んできた21世紀を生きる人間の資質として、「地球規模の視野で考え、地域で実践できる」力量をもって、持続可能な社会の実現に向けて共感的・協働的な生き方・社会的実践が出来る人間を育てることを目的としてきたことに共通する。そこには、生徒たちが親密圏から公共圏に出会い、災害の思いを共有する受苦的な経験を通して自らの学びや生き方を問い直していく

路が開かれていく姿が読み取れる⁵⁾。この文脈の上に、すなわち⑦地域の未来をデザインする力として、本稿で紹介する「奈良エコシティブロジェクト」の取り組みは構想されていったと言える。

3. 奈良エコプロジェクトの概要

講座についてのガイダンスを通じて、生徒達の関心は「人文科学」「社会科学」「自然科学」、そして「人間学」「制作」へと分かれていく。卒業研究という表現活動は、佐藤学が言うように「学びの活動を意味と人の関係の編み直しとして再認識するとすれば、学びの実践は、学習者と対象との関係、学習者と彼/彼女自身（自己）との関係、学習者と他者との関係という三つの関係を編み直す実践として再定義することが出来るだろう。学習活動は、対象世界の意味を構成する活動であり、自己の輪郭を探索し、かたちづくる活動であり、他者との関係を紡ぎあげる活動」であるといえる。ここでの「他者」を、「社会」と読み替えるならば、卒業研究という体験は、いまここに学び生きている私を社会との関係性の中で捉え直し、学びの意味と価値を語り直す経験へと高めることになるだろう。

「奈良エコプロジェクト」は2年前（2009年度）に卒業研究で行った「佐保川プロジェクト」に引き続き、中学生が出来るESDの立場に立った地域デザインを構想するプロジェクトの第2弾である。卒業研究は基本的に個人で行うものであるが、このプロジェクトはフラグシップで行われる。今回の「奈良エコプロジェクト」は、奈良の公共交通を考えるということで、3年生の鉄道ファンの生徒が集まることになった。

プロジェクトの進め方は

- (i) 文献研究
 - (ii) 実地調査
 - (iii) 提言のまとめ
 - (iv) 広報活動
- として、展開されていった。

総合的な学習の時間に位置づけられた「卒業研究」の時間は、主に文献研究に充てられ、各自が持ち寄った研究レポートを発表し意見交換を行う場となった。

夏休み期間中に、LRTの先進地である豊橋鉄道（愛知県）、富山ライトレールの調査活動を行っている。研究室訪問（9月）では、世界遺産都市・奈良⁶⁾について中沢静男先生の研究室を訪れ、LRTと奈良の景観との共存についての質問を行っている。さらに、環境フェスティバル（11月）で広報活動を行い、高い評価を得ることが出来た。

次に、「奈良エコプロジェクト」の研究の概要を以下に紹介していく。各章の内容は生徒作成レポートからの抜粋である。

「奈良エコプロジェクト」 第3学年
木村直輝・北村悠自・鶴見直生・真弓凌輔

目次

第1章 なぜ新しい公共交通機関が必要か？

第2章 LRTとはどのようなものか

第3章 これまでの導入例
富山ライトレールの成功例
日本国内での検討例
豊橋鉄道への訪問

第4章 奈良にLRTを作るうえで考えること
第1部 LRTを作る上で必要なこと～線路～
第2部 LRTを作る上で必要なこと～架線～

第5章 LRTを作る上で必要なこと ～停留場間隔の設定～
～ユニバーサルデザイン～

第6章 奈良のLRTに必要なこと
LRTができれば奈良の街はどう変わるか？

第7章 最後に

本卒業研究の内容の概略は、次の発表用資料を参考にされたい。

◆はじめに

奈良は日本の観光都市として、多くの方に訪れていただき奈良の歴史について知ってもらっている。昨年(2010年)は、平城遷都1300年の年で、奈良は大変盛り上がり、主要な観光地はきれいに整備された。それから1年経ち、私たちは観光という目線で見ると、大きく引かかった点があった。それが、移動手段である。

奈良には多くの公共交通があるのだが、そのほとんどが京都や大阪などの都市を結ぶ鉄道である。観光客の方が奈良に来ていただくのには問題ないのだが、観光地同士の移動の際には不便な場合がある。特に奈良市内では、ほとんどがバスの移動に限られていて、きちんとした時間に目的地に向かうことが難しく、また環境にも悪影響を及ぼす。そして、観光客のマイカーなどによって、さらに渋滞が悪化する。そのような奈良の現状から、私たちは奈良に新たな公共交通が必要ではないかと考える。私たちは、富山県の富山市や高岡市で導入されたLRTと呼ばれる新たな路面電車について考え、提案したいと思う。

◆LRTとは何なのか？

LRTとは、Light Rail Transit の略で、北欧を中心に近年導入が進められている、軽量の旅客鉄道のことだ。LRTは、建設費が一般の鉄道よりも安く建設も簡単で、定時性を保てることから、都市部などを中心に導入が進められている。最近では日本でも、富山市や高岡市などでLRTとよばれる低床車両(この先LRTとよぶ)とともに導入した。このように、LRTは建設・経営・利便性の点から注目されてきた。さ

らに、環境の面からもこれまで車を利用してきた人が、LRTに乗り換えることで、渋滞を防ぐだけでなく、都市部に進入する車の台数も抑えることができるのだ。

◆日本国内での検討例

日本国内でも、これまでに環境問題に対してや、渋滞問題を解消するためにLRTの導入が検討された市がある。現在そのような流れの中で、富山市では新たにJRからLRTへ管轄を移動し、車両も全車低床車両にするなど、LRTに導入に前向きな姿勢を見せた場合もあった。実際にLRTに変わってからは、これまで自動車を利用して利用客がLRTに流れて、利用客が増加したというデータもある。

ただし、多くの市町村で、予算面・道幅・利用客数・政党との兼ね合いなどの制約によって、計画が失敗したケースもあった。特に宇都宮市で検討してゆくうえで最も大きな制約となったのが、政権交代による国からの交付金が見込めなくなったことである。LRTを建設するうえで、大切になることのひとつが、国からのLRTに対する支援金・補助費である。このような環境などの人類に大きな影響を及ぼす問題に対しては、さらに国も真剣に取り組んでもらいたいと考えている。

◆豊橋鉄道への訪問

わたしたちは、ただ単に文献から調べるだけではなく、実際に路面電車を運行している、豊橋鉄道の石川さんと対談をした。やはり、実際に路面電車を運行している会社に働いているだけに、文献などからは知れない実際に働いている方の生の声を聴くことができた。さらに、実際の車両も見学させていただき、今鉄道業界で積極的に取り組んでいる、バリアフリーへの取り組みや工夫点も知ることができた。豊橋鉄道では、低床車両「ほつトラム」を導入していて、車両の各所に工夫がみられる。たとえば、車両の床を低くするために、もともと床下に入れていた機械を屋根の上や車両の側面に置くなどの工夫があった。そのように、バリアフリーなど多くの利用客のニーズにこたえることも、利用客を増やすための第一歩である。

◆LRTを作るうえで必要なこと

鉄道を作るうえで最も基本的なことは、線路の敷設である。ところで、路面電車の線路はどのようにして敷かれているかご存じだろうか？路面電車の線路は2種類あるのだが、その一つは最もオーソドックスな軌道で、これは一般の鉄道と同じ枕木の上に線路を乗せ、その上からコンクリートをかぶせるという簡単な施工で終わる建設方法だ。

もう一つは、普通の道路と同じようにコンクリートで道を作るのだが、そのコンクリートを削り、ゴムで線路を固定するという方法である。この方法だと、メンテナンスが簡単でさらに騒音が防止できるという良い点がある。さらに、車両が安定して通れるというメリットもある。

環境・景観配慮の点からいうと、さらに芝生軌道という現在注目されている敷設方法がある。芝生を線路の周りにしくことで、熱を地中に貯めることを防ぎヒートアイランド等を防ぐことができる。実験データによると、10℃ほど下がるというデータもある。さらに奈良では、緑の芝と合わせることができ、景観の面でも推進したい方法である。

◆LRTができれば奈良はどう変わるのか？

まず休日の交通渋滞が緩和される。そもそも、休日の渋滞の原因である、観光客のマイカーを郊外に駐車させ、LRTに移行させるということは渋滞緩和だけではなく、ほかにもさまざまなメリットをもたらす。

次に自動車利用が減少し、地球温暖化抑制に貢献できる。やはり、車に比べ電車は輸送人数対二酸化炭素排出量が格段に少ない。もし、毎日の通勤で利用されるようになったとすると、年間を通じると大きく排出量を減らすことができる。

最後にLRTを奈良の目玉とすることによって、今まで以上に観光客が増え、結果的に奈良県全体の活性化につながるということもあげられる。奈良と言うと、奈良の大仏や平城宮跡などの史跡や文化財を中心に観光客を集めている。もちろんそれも大切なことだろうが、古きものと新しいものとを融合させることで、奈良をより素晴らしい街・環境の街へと発展させるのではないだろうか？

本研究では、社会的共通資本としての公共交通という観点から、共生型の社会の実現も目指してユニバーサルデザインについても言及している。

4. さいごに

卒業研究での「学びの編みなおし／物語り直し」の提案は、私たちのどのような教育実践のなかから育まれてきたものなのであろうか。それは、「学習集団」（習得共同体パラダイム）が目指した学問探求力を越えたところに生まれてきた。つまり、私たちが目の前の子どもたちの現実（例えば受験勉強への諦めや強制、学びへのシラケ等）に向き合う中で、「学びの共同体」（参加共同体パラダイム）へと内実を徐々にシフトさせてきた結果、「学問構想力の涵養にひらかれた学びの構築」（庄井）がそこに芽生えてきたためであると考えられる。それを、どう実践として私たちは授業をデザインすればいいのか？そこに、庄井は「物語共同体」を提案する。それは、「まず、教師自身が、すなおな言葉で語ろうではありませんか。すなおに悩みながら、素直に問いかけながら、自分の言葉で語ることから生まれてくる学びあいを核心に持つ共同体」を、物語共同体と呼んでいる。卒業研究は、多様な子どもたちの「問い」と子どもたちが経験して

きた学びの履歴と、教師である「わたし」の学びの履歴が、対等に学び合う者としてぶつかり合いせめぎ合う世界である。彼らの問いに応答する緊張感が流れる時間である。時に向かい合い沈黙の時間が流れる。庄井は物語共同体を「自己の感情世界（あるがままの感情）と向かいあい、生活概念と科学的概念の相互交渉による両者の豊饒化を支援する構想メタファーである。物語共同体は、自己の内的・外的現実に向かいあいつつ語り合い、支配—被支配という権力関係を解体し、相互自立的なパートナーシップを構築しあいながら、世界・他者・自己の意味を絶えず生成しているよう支援する共同体のメタファーである。」と述べている。

奈良エコプロジェクトの教育的価値は、「自分たちのかざらないすなおな思いを表現しあいながら、

先行世代の文化テキストを批判的・創造的に解釈しあい、未来の文化テキストを自分たちで想像しつつ創造しあえる共同体、そのなかで他にかげがない自分の語りによる作品を刻々に創作しあえるような自己創生的・学習共同体を構築することが、物語共同体による授業改善である。」という庄井の言葉に集約されるだろう。そこに子どもたちの卒業研究が位置づけられていったといえる。

この「物語共同体」を、社会的共通資本の学びとしてのESDの方法論として位置づけながら、人間を豊かに成長させる学習システムの構築を私たちはこれからも子どもたちと共に構想していきたい。

註

- 1) 奈良教育大学附属中学校「学力がつく総合的な学習の構築」明治図書 2004
- 2) ③の情報活用力や④の発表・表現力については、「学力がつく総合的な学習の構築」Ⅱ-3
- 3) 「学力がつく総合的な学習の構築」Ⅱ-3
- 4) 宇沢弘文・鴨下重彦編「社会的共通資本としての医療」東京大学出版会 2010

宇沢は社会的共通資本としての医療について次のように基本的な姿勢を述べている。

ヒポクラテスの誓いを現代的な言葉にあらわしたのが、1948年、世界医師会によってつくられた医師の倫理を規定したジュネーブ宣言である。

「医師として、生涯をかけて、人類への奉仕のためにささげる、師に対して尊敬と感謝の気持ちをもちつづける、良心と尊厳をもって医療に従事する、患者の健康を最優先のこととする、患者の秘密を厳守する、同僚の医師を兄弟とみなす、そして力の及ぶかぎり、医師という職業の名誉と高潔な伝統を守りつづけることを誓う。」医師としての道を歩み出そうとするとき、ヒポクラテスの誓いの精神を自らの心にふかく刻み込んで、医師

としての職業を全うすることを誓うのは、洋の東西を問わず、医師を志すときにもっとも重要なこととされている。

- 5) ここでは、土井が指摘する「親密圏」と「公共圏」の関係を用いて、現代の子どもたちが置かれている状況を説明する。「親密圏」は、過剰なほどの配慮によって表面的に慣れ合っているだけの「優しい関係」、自己意識の感覚化とそれともなう断片化によって、自律的な指針を内面に持ち合わせなくなったために、代わって具体的な他者からの絶えざる承認を求めざるをえない関係性である。また、「公共圏」は、教室、授業、それに昼休みなどといった学校生活すべてであり、また子どもたちを取り巻く社会のことを示している。

(参考文献、土井隆義(2004)『「個性」を煽られる子どもたち』岩波ブックレット

- 6) ユネスコの「世界遺産リスト」には数多くの歴史都市が世界遺産に登録されている。本稿における「奈良」も文化遺産の中の大きなカテゴリーの一つになっている歴史都市(Historic cities and towns)のひとつとして捉えている。

本稿では、この歴史都市である奈良が21世紀の人類社会の質的向上のために世界遺産を含む都市として、その果たすべき役割、歴史的景観を有するものとして、ここでは「世界遺産都市」と呼称する。そして、奈良もまた保存や景観など居住や

観光などの歴史都市を取り巻く問題点や課題を他都市同様に共有するものと捉えている。本稿のモデルとして、フランスの世界遺産都市ストラスブールを参照している。ストラスブールでもLRT導入時は商店街の反対があったが、「人がまちを歩いてこそ賑わいが生まれる」という認識に現在では変わっている。エコシティ奈良の構想は、奈良観光の新しいかたちとして、また世界遺産の景観を守っていくための提案であり、それはまたユニバーサルデザインが活かされた生活圏としての地域の持続可能な発展があつてこそと考える。単純にストラスブールと奈良を同列に扱うことは出来ないが、世界遺産都市奈良であるからこそ持続可能なまちづくりのモデルとして現実味をもつと考える。地域の商業施設の活性化など複合的な課題は多くあるが、「車は手前で止まる」という公共交通の試みが、この奈良の地から始まることを願っている。

参考文献

- 1) 松原元一「数学的見方考え方」国土社 1990
- 2) 佐藤学・佐伯胖・藤田英典「シリーズ学びと文化 ①学びへの誘い」東京大学出版会 1995
- 3) 庄井良信「癒しと励ましの臨床教育学」かがわ出版 2002